源氏賞翫抄

天

源氏言遊抄上

以抱信乃おこなひ村上乃天皇の女十宮大弁佐乃東つ信へ
めつらかなる事をや伝へしは而重ねてはうつ不行しかやう乃事
信いめるなしとまいらつしからを新後撰に知て侍へきし紫
式部ハ紅葉乃ハ事をれいまそれ伝へ
と河海の説ハ石山ハ毎秋して此事を行ふに初しも八月
十五夜の月湖水まうかりて侍もすこ流りて抱信の風情をた
らひをるを志まりとして仏前に有をる大般若乃料紙を幸ふ
ト信て定を海あ一の事を書て前後を信をるとこ毛ハらて
すまれ事にこしひ十五夜毎ゆ侍りしを大般若
料紙を幸ふ報謝のなるゆ大般若一部を自事て為しをる
とこ入り但般若事なるとい不実しこ式部ハ上東つ信乃友
女盛市古屋時ゆ娘母ハ常陰外高信ゆ女ハ種於流信四ゆ天皇一心

遊佐文庫藏書

三釈の血脈をゆるさるゝゆへらるゝ云林院よ兩所しるしをとゝ
も云林院のうちにをとゝ云所ゝ所ゝ云ひしを打こゝ通云うすと
宗茂乃ゆゝて宗茂ゝあゝゝあらゝゝゝゝ又源氏一紙の四宗
上乃ゝゝをゝをゝて申ゝ所ゝも一般一条院のはめしとゝ乃なゝ
と云ゝ院へまゝりゝゝらゝ法師あゝ家ゝ法へゝゝゝ
ゝしゝゝゝゝゝゝ乃ゆゝの乃て号すゝゝも乃ゝ宗
門院ハ一条院の后宮御堂殿の御女ゝ掛絡の大宮ハ君臣父子夫
婦朋友の道をゝて数人ゝゝ又掛盛者ハ裏會者定離埋人
乃嬉歓ゝゝゝゝ源ゝ所ゝ好ゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
好ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の初ゝ作ゝて康和乃法流布ゝゝゝゝゝ宗相ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ髭号のゝ源氏の右乃ゝゝを塗ゝすゝ所ゝ又源の字ゝゝの
みゝゝゝゝ水上ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なゝゝゝゝゝゝ掛なれゝゝゝ来世ゝ人の言葉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ新ゝゝゝゝゝゝ古今の序ゝ山下水の言ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一紙書おゝゝて法一条院初て法院ゝゝて掛絡ハ不可統の掛ゝ
宗茂乃ハ日本記ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ法流四位ゝ云女房稱ゝゝ或乃を日本記の屬ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ一部ハ荘子乃寓書をゝつゝゝゝゝ寓ハ粗ゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
寶ハ源氏掛絡ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ源氏作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
利の祖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

桐壺

桐壺の御はらからの御桐壺にしつらはれたる殿の名にはいとやんごとなきものの御心ばへなり
左は桐つぼの更衣にいとしのびたる女房などをとりて出羽命婦などいふ
門とも桐つぼの天皇とのたまはせうせ給ふ絶えうせ給ふ人の
父の少ひらんまゝにまゐらせて宮仕へ人はいとまれらにまれなるまれなる源氏の君
うこまりさいとひ人はいとまれなるまれなる源氏の君
ことわりなるそはのゝまひしにあまるまで人のそゝのしるしあ
はせるやうなる源氏の君こつはなるまで人のそゝのしるしあ
かうなるまでなるまで人のしるしなるまで
といひなりてはいとせてはいとまれなるまれなる
人なりとて高倉老女房なども行ゝまつりなるまで人のゆるゝ
内にまゐらせたまふ衣にまゐらせたまふ衣にまゐらせたまふ衣にまゐらせたまふ衣にまゐらせたまふ

かうしてまひさゆくの御桐を出給へは御いとへちかくしかす
いとゞも給くなりて更衣乃事は
終りてわづらひの行しさまはさ川しこさ命
なりまする君にうき世を出る事ありさましいさまかはさ命と
かへしおかれたる事も哀さそまるそのひてこれ秋のく皇給ぬ御門
皇后ての御ふまへしひ思ひやへしなくあこ聞えて例乃御法は
らでおさしむる所へ勅使にて三位をくゐあてかはせ給ひてゐ位乃
更衣と見へさへ一ささく乃位をさつけまゐらせ給ふなる時御ん
乃ましみちは女御なりともいかほとさいはひなりくおほかたなる世のそしりを
とてかくもおひておりとてゆりしもはせめて猿まありとおもはすふ成
へし母のいとふかまて源氏の君も更衣乃母君をたゝかたの里に
おりまする秋にも野分吹るて物あはれなる夕暮にいよく尚
小し人のまるも思ひやく更衣の母のりしへゆきへい乃命婦といふ

女房を御使にて御文ありそのはの御製は
宮城野の露吹むすふ風の音に小萩かもとを
思ひこそやれと云一字にうちて御所を禁中の事にして
御事くこゝやのうちさへ風乃音給ふさにまして祖母君の
所にて云ん死小萩は子ぢあまた事なりしませ給ひ母君と命婦
抱給なりて秋更衣まいらへ給ふ更衣乃衣裳の御かた見とて
一くだりにかくしけのてうとそへてまとゐそ給ふ更衣ら
せたまひては里乃住のもあまてあるに弘徽殿乃宿も出乃音
たけさかもまうしかくて源氏の君七歳よなりて御文をはじめ
なさるに学文よもさとく琴笛乃音まて雲ゐをひゞかし
其乃まゝ帰りさ給ふ高麗より相人渡りたる人の
やうにて相せられけるは御ねの人なりすくれ給ふとの給
たさゆくくやうらみひかるやうにうつくしきにめてゝ光君と相う

紅梅殿もうしこと十二まで元服し給ふ時左大臣のかうむりさせ
給ひしとうのうちへ入りたまふてふ世間はなかし訳なりしかとも
大臣とのへうこと世間はなかし訳なりしかとも
うちくおかせるまゝにうちて左大臣殿の姫君ひとりおり
ますを源氏はいかゝ思ひ給ふ殿へ内侍
いとさうしにそつりゆひはやりきせを契るに
こめつや元服のはてに契りをいとしたまひ
もとゆひの髪を切返して其のおとゝ
ひとりにもうさんとおもひよこす源内
あをすいんゆく契りの事のうすくて云ふこのあせるとかう
ことを又そつりゆひはやりきせを用ひさせを安にもたしやそ
を取源氏の君おかひしのへおりうちうて姫君まあひまあひ
乃ことに姫君乃事之更衣くまを給てはい御更衣きのゝ
のゆもたてるのおすもすさゆくてのくるのたにはもうく
さひとをいつをまのせくを足給へる更衣なすは姫へさもな
てうとまうかさうに光帝乃さの姫ちすくまを人をを
内侍乃すけと云女房乃奏せしにはんうつり更衣乃かけさも
うくさひとさゆくおかせくうちにはまのくせのはすかち
うちそめ人すくまをひとをいつくこ濃うてはんかくも
やうゆくとと姫君ようやくけのはうちをい光源氏をうと人
てかやく日乃ものもとせくこ君臣にはりまするちはかの
女房と号すい光を源氏のおさうゆうもたひうとんはと光
事をそつゆはんうをとけまひいくはは服まいてさ給はい
次泉殿とせくこおりてはは門乃はるゆ姫はい源氏のはるこ　相臣の
御門へ延長まあうこ光とはいとを光者はのうまち

●帚木

此巻は雨夜乃品定と云ふ事ハ五月雨源氏の君うち乃宿直所
に物忌してはもくところにおはしますをたれくさめやさんと云やた
大臣殿此御子葵上の御兄頭中将まいりてよろつ物語の
次は女乃よしあしのさためをし給ふ所にたのむるのゝ藤式部
と云もの二人来参て源氏も頭中将も共に此品さため給ふ
此人々ちからちからあまりかや女の善悪乃品々を定てには大工乃
細工するにも絵をかくも女の心此三また人く女乃心くさをいひて
きう世帯乃芝を雨夜乃品定と云又雨夜の品定とも云なれは
云藤式部省巻ひあたりさりけるの事をかたる時頭中将も
あはれに思ひし人のゆくへしらぬ中将の小方よりおそろしき事を
いひきてうれはおもてにかくれなくかくきこえしん人のゑ絵
給此女御くゝ見たんとせしわりなき事に乃花を中将の常夏とて

山かつのかきほあれともおりくにあはれをかけよなてしこ
乃露　あはれともいはれしと云ふ此歌に中将乃御子を左子にいひて是
とけよみしなかへし上句ハ早下句へうつる床夏に夕顔乃事をいひ
かけたる歌ともかくきこえ給ひしを源氏見付給てよみ給ひける絵
是を夕顔の上と云へりなそこの君を撫子とも云なり
又頭指の抱緒は神無月の比月のおもしろきにうちつれてまかりける
にある殿上人我と同車して来りけるか我もかよふ女乃家此君を
見るは此殿上人車より下りて此女乃所へかよひまめやかに菊乃花
面白くうつろひ紅葉なとみたれて笛をふきならしけるに
なよらかにふけゆく月おもしろきやうなる頭の君を云て女和琴を
しらへけるに彼殿上人のよみける歌

琴乃音も月もえならぬ宿なからつれなき人をひきや
とめける　琴の音も菊もえならぬ宿なから別の男をひきとめぬと
我しらすとまりたると云心なりつれなきといふもとあす思ひわかれ

人のんなるべし女達

こからしに吹あはすめる笛の音をひきとゝむへきことの葉そなき
なれこからしも笛の音もうはのそらなる哥なれは何とそいひとめん
そことは此前左こからしの女と云へし此時より後は此女の事すへて御中すてゝ
也其それ女はかやうにちらかれたる物なれは物さたこゝろせん女にはせさゝまへと
公達をさる頃は只さる事なき式部丞物語は博士の娘の事をのたまひし此またの時
初よりは此の所もはしめて物からなれにあひていかやうなる心なりやうなれとも
さふらうてはちゝのさうやくをすてしてくるし也左まはれにわすれすと
うらこそ

さゝかにのふるまひしるき夕暮にひるますくせといふか
あやなさは我家のん事は知たるかを物をそ事なくさふらへかなの条なり
此四句は人の心へさしたて母にはへる也今はそふの意なる
うはさてそのまゝ中なるとかひるまをひきたて女

手ならぬ物をしてへそこそ中なるはひるまも何かまはゆからまし
まし物をへこそま位置中なるは日かすをもちつまし夜物
物左まちつかなる此女儒者のむすめなれはてもちと覚えめて
こいくしく此かしこき此左まひろくひの女と号はて物語をも物語て
源氏物中将などは此女まむつひてあきらんは鬼ふむつひていかやう
なるんそてまるひかひとこちらけまいんまふ足物るまなして
女の思ふやうなりかはれ事をもてらん女の事を上中下におるらく
さるしきれも上京のいわるさるはこくねらのさうやくは大蒜の事
世俗まいんまくと云事なるなくて物中にのこおりましておもひの
あるをちりすてさまなりんもいりとそ大臣殿へおりたちならわい
今宵かへるさうわたりまし人へくやま公家衆てはしら物白今宵文
まうくみんいいつてもおりみちの中川ま紀伊守をそて中郡へとひく
さ者ありかまつり中へおりまます此のかんうれとまてせんさい面白く

うへ御ぶしさ住居らるゝ君もつゝ志こそ、おりゐるにわる山紀伊
さうゐりしあまさてゆきを紀あるうつをこの君をゆて
うて身給るまゝ所ようつをこの君をゆて
所乃西のおもてこそわの者うしてうさ女房の身まて我法
うゐさうこうをゆめひしこ和文くは伊乃人こも時三つまり
る程中乃僧なれをうをつをうつて思ひへつるるてうつ
せこにあひまうてきは志うさくおりして又さたくはまおりてうつ
きこが身小君をこ武三人へてさはくたう給へこ伊乃所を
へてうれをあひまう事うるわをうこ給まて
なるあくの人ものこうてそうの京君はりあやなくまし
わるぶ　な寄　そは家やうやや紀伊つるきまなをこいてはる
君あるこ山人のてうありあひさこさ人のつをこうてはやうく尋
まこうこ云のこ小君あるの君れまる所と尋て山伊寺を伊女

乃ぶきして伊与守の子紀伊守のりしゑ方たゝよおりまして うつせ
と四位ーそめ[illegible]りたまをうして れ川ぶよい又紙よかをうかへ方うし
におりまをとあらーいをゆのめいうくゝ悦ひてこゆうさうい
そこさけりうさてさうゆゆなうつおかこうすめまりせーう
を歌も技女あひをして宮ーくゝらせすこたりやくに四位まち
てひうへさ伊ますやおりきん宮蜻ゑ弟小君をを付我
家人のやうう給昔懐ゑ所ゑせうをてんゝの給ひくゝさーうめ
つひうゝ三給十二三ゝうれよるなかこのんをゝうわを宮蜻
ゆい伊与守の書よりゝわ光ゝ契りかつ中うゝ四つうく
ひゝうゝせ給昔ゆよ伊へて宮に四みうよりゝひうゝさて伊
与守国へくうゝてゝまゝ伊をうゝひ小君ゝ車に乗うひく
中川の家へゝうゝうゝを小君ゝこの四月て人ゝうゝ宮に
のうゝ給へ西乃四ゝうゝて四ゝうつせゝ付ゝひうをて

基ゝうゝて給ゝ西の四方ゝかゝつひもうゝさ海ゝて所平を
うへてゝやうゝなり給かようつをゝこのゝみゝうゝくゝわゝひな
ゝも世ゝゝしゝめりゝひめを源氏乃四ふのうゝに四うめひ
うひゝくゝいうゝくゝゝてもん給ゝひをへゝこのをゝへ四へーゝゝ西
乃四方宮殿のゝさに海ゝたうを給ゝて人宮ゝ川まうゝた
やゝうゝこのひへをうつせゝ宮給ゝてゝひゝをうゝふゝ乃
四方ゝ海ゝをゝて給ゝうをんゝさゝ乃人ゝ四月ゝうゝひゝを四へい
ゝうゝ人ゝ人ゝ人ゝを四ゝをゝてくゝいをあゝ人ゝをゝい宮蜻乃ゝあを
四方のゝさゝをゝかゝゝ人ゝ事ゝおりて西乃四方ゝの四ゝをゝせゝて宮
乃方ゝ人ゝをゝやうゝひうゝ給昔宮蜻乃ゝをゝさゝてゝうう
すうゝをゝうて海ゝひゝ西ゝの君ゝ四ゝ給ゝうゝ渡ゝれゝ一条の又
も垂たゝすゝ給ゝて親ゝ人ゝの女将ゝりゝ人ゝをかゝをゝてゝさゝう
りて女乃ゝんをゝんゝて彩帽の萩ゝゝをゝて言ゝを送ゝりゝ給ゝ

はゝのもすそ風はなびきてうちとけ女房の姿と
云こゝろをはなれたうへ結ひ
ひく
宮殿乃方をうへてうゑ本はなに松人〻乃多つき
ゆめさまたけうゑを殿乃あけはなれ寄こゝ男にあそり
うゑをふ元あの元ゑ作さすにあさくもたれはれ人〻まい
宮殿乃羽りてく家のあうこをて思ひくよあうこそて
かれ本うこれの家乃やうにく人〻まに紙のあうこと武安員ん
なまい意まうをいそかうなかうゆうよ文かなりうゑ世
いあうさりく思りうる女性こと

● 夕顔 巻二

六条の院休所と申へし桐つかの院乃方前房と申せしの
院休所六条におりまする所よりく人〻る紅房と云家に立
給りて住給もつゝ給つすゝ給ひつゝを思へ給休所へ
源氏思ひくよかし給日乃院乃六条に中宿り所毛源氏乃
院乃乃と惟光ゑ母氏めのゝゝうゝを六条へおりまするつめに
毎ゝうんゝて立ものひよ門をおくあけ給隣を見ゆ
ゑ乃ゝうゝ小家のうちよりを女の家ひすをいのゝ
てうを思ゑ乃花ゝて住多ゑ武花を折て奉ゝこの給ひれ書
くゝ武家の西ゝ毛に生へ
こゝゝをゝ給ゝ給ゝ白ゝ
仏のてゝうを思ゝうゝみゝ白露乃光ゝへゝゝ夕ゝ乃毛
つのてに源氏れ右ゝ見ゝ
ゝやてゝうれゝゝもみめたゝを思ふ乃くゝ見ゝ花多
ゑ乃ゝ毛書てゝ作ゝゝも見ゝ
ゝゝこゝ乃人をゝれゝの武家をゝて書の名ゝ女乃名毛も
夕ゝゝのゝて号す毛いゝ多ゝ毛ゝ武中乃ゝゝゝ

こゝの母上こそ惟光さぬくまん仏ゥすし源氏おりまして給ておもく
紛かひ給ひけよ八月十五夜月のくまなきに此家まて忍もうすひ
給ひぬ事ともせよひゝりかきもの声も御枕まさしおもしろき
ほすし又明方をくぬてうけきやうしすゝへやらん老たる声にて
南無当来導師とおかしもさけおひくまにてうつへ此世ならぬこの
らす来生を頼ますしの給ひて うちそくかねこうすかゝまと言うて
ほそこえ世もふかき契りたかふなと縁世といのる事を我契りと
たのみしたまへうたそくとい有賢なるか家の行をする人を
いかり長生殿もそなたをかけり枝をかはさんとそ契りを引かへて
弥勒の世をまちて契り給ふ女の返事は
前の世の契りしらるゝ身のうさに行末かけてたのみ
かたさよ女人のうきみを上ろはて来世を頼みさん御ものひこ
かしやそらくまを給へとて端おかしくて十六日の暁文字の宿域
いさよふ比給ひてなにかしの院へおりたち給ふに荒まさりたる庭の
草木も見る前にて秋の野らなる池も水草にうもれつゝと
すさまじけるにひめうちとけくるは沖中川と契りまひくはは
らく給ひけるにかをもわらひまひく
夕露にひもとく花は玉ほこのたよりに見えしえにこそ
ありけれ夕かほの卉ゆうてとさかひかる事をんしみく今かゝるも
あるやうと云心なるをしる事をひもとくと云花の心もそへてい
ひかくるこゝろは一つゆく云心也へし母返し
光ありと見し夕かほの上露はたそかれ時のそらめ成
けり夕かほの宿にてよそなりしたそかれ時に光ありと見しは空
目なりしと今見てうたかひはれて源氏をかゆめ殊なる寺から
やうにのひかりけるは十六日の暁すくる程に物の怪の事をも
此女先に風説入まいらせぬ家かこの灯かくも消え物のけさ

源氏の君の右方をはさて女君にそひて京
をさ遠くゐたまへるけしきにて三條院へ
まうでたまひ合て三條院惟光らのしたり
かりに尼よりかく位々高へうゐむりにそてみくしてたのせ
て物をはこかせ給へるさまいとあはれ事に古を思ひ出給へる
らいと物かなしけなる女房源氏に語りて二条院へおりぬ今一日
なりをまつ人々の語ひくく惟光朝臣にてひ給ひて十七日
の夜なけておりて見給ひなりの御ものそなたをさ
らきまひ給ふ二条院へ入給へらせ給ひても忘れがたくおもひ
給へる夕かのことにつきまひてせる物の字君はすてらはて
そ乃君は例のすおりまして九月の末つかたをこそ
まひ給ふ
さて右をを源氏の君へ申せてつかうまつりて忘られて忘さしうつ
まつる初瀬まうでの君を尺有く源氏三条院へ
まうでたまひ

若紫

あの君源氏のよいけうくおりせてとき源氏乃寺
てあつまつていつしかも見ひ給ふ物ふかひ給ふ物へ乃ろく
さとはりまろもを付給ふ見ひ給ふさて世ふたる物をと
たる家とそこひしくき沙へ乃ゐ在をを源氏乃ん
かりて文殊門のあさうすおりの寺へ乃
うりに家のをを物はすてを人まつ世後おりて乃寺へ家はい
在はかのいかめしい家乃ゆ乃つて家は根かかつてい後へる
かしこい物のはいる事を云在はかに家の上はるへる源氏
一紙の四ま家のをの乃れかくまうる在物語の音を家式部を
号するものへりしかの位をを光君十七歳の長うつやこ三月ひ城
まうでを給へんとて小山まをんのひしりのをてるをりれを老まち

宮のかまとゆすりて京のうちはゆくゆくへかりまするに三月の
つごもりころおい京の花盛すぎて山の桜盛りかとみえる皮垂れ
ちりかすみてうぐいすの山をいでるもいと京はけ方うとかなかめやりてな
らひまつわかふうれい面白さとうてやまたに仕の人くおこりまき
ぬりまちんとて東国のいろひ新さうとの人いかのひろうてのひげと
さうとの面白をんてうの海うとかくくのつめて西岸の
入口格をつかりおりひいとくに成て寄せ来る毛ホ明石浦去
へうきうんさておちいとこうに治りぬたうこ新ちつられの上をんを西
治よ小栄塩をうにいうこうてきこけうを赤をあやしくおりて西ふ
にに仕ふ多人毛いふにうの傍新乃二年計このうを始ふ上ら三年
このうをんへうに出物よ女乃住けつひをとはやしくおりけ夕
書の新乃ようれよ塩ら尺始へに出物の西おかてる佛うをんをきうく
平余かにうわうら十計女ふうに尼君のおにはていねさうすめ

ふをにうをうて後ふてをそら毛ら家のよこ氏時に現一初ふ尼宮傍
新ををうらうて京をからそあに
移りておりをうへ紫ふい尼公乃に孫かしいをひをりておりすあへ一
紫ふい兵新ふの家の出物ふ無いうせまふ無ふをを尼ふ尼ふ公ふ
へ源氏の君無ひておりをうやかの傍新ふて光に仕ふて者乃
ひうをも出物よをまうけ仕ふ上ふ小ふ者のふ人ふ上ふ
かうも成くおりすまふ傍新のふへおりまをて上新をまう
仕ふつ世の中乃地治のついてふ彼姫君をやーるひをて上ふ
ふをに出ひかいくりくあうさふをと傍新ふ最ふまひ初新のつと
めに阿弥陀佛のおりまふ西の乃仕ふ乃に人をひあて
尼公へ姫君のことのあ一初ふひくちを海くひをのへてひひ
ふ乃ひ二条院の西乃をひふ上へ者乃に出ふ乃ふ
とをふ上ふ乃祖母尼公ふせふへ乃腹をふりてふ祖母元九月の江

くま給ハ二条院へむかへとりまゐらせ給ふ十月の頃之源氏の御舞のやくに
ちくこしかたかくらんさ波わすこ又人の中にたくひなかりしかハ源氏
一流の内に第一とす赤七まてハそれなりしかハけさのあまたに
源氏もかくなくかくれなかりし小山まて御ちかひ秋毎をとりて
さ山風ひやゝかにふきて吹滝の音ちかくきこえて掛落ち暁かけに玉ましこ
立ふ雲のせんかうのかほり山までかほりにつまそいとたゝしく滝の音にひゝき合ふを聞給て
吹ませふ源山おろしにゆめ覚て滝のおとゝれ
山中の感よ源氏もともになからんの旅へし帰りはのちのへ
きたりて御らんしさ岩くまの苔の上に人々おりてあかりことさきら
あそひまふ林中将弁少将なとかくの御ともにて中将ハ寺なんの
なりやうたうた雅よ僧都琵琶を源氏の御前にもて来りて御ひとり
けそりつ山の色もおもしろくまへとの後ハ中にありさまやすききさめて
ことなきまて給人ゝ立居ハあはれ也かくてかへりたまひけり

ほまへにてそこを其の僧都かしこんかへり給ての又ことつほ
ともに御車入て尼様に付て其ら給ひしん

末摘花

常陸宮とてみやおりましける御姫君かつきまふ
又ふうせあひくはたゆらむこさゆまそいおりまする源氏の御めのとの娘に
大輔の命婦と云あり此姫のつかへにて此姫君のうへかたりしくに琴を弾給
ふと聞しかれハもの琴の音きかせ給へとてのたまひあはせて月よき夜
なる秋の宮へおはして立聞のふよひすかなる琴のおとかなしてやゝてうちよ此
やさしまゐらせ御ゆかしき人の姫君の琴かなしくおつむにいとゝ
御心にかゝりて琴の音よ付てまいらせたまふなれ男の跡をつけ
やおはしに頭中将也源氏のうらめしきことつきそておりけるを
知らねとおもひてかり抜まへに御あとにつけてやつかしそて
それにつけて大内山おまへにも入りさうけれいさよひの月

大内山の花ざかりなれば毛い禁中のんてんの内裏の三重をかすみこめ
ゆうこうをいろどりたるにあらぬ花をかざりかつ桜
奇こ源氏を月まちてこそ三重さきぬるおくのやまぢ
黒ろぬ新をいろどりて紅月はへさうの山を雅ろ彩ろ
雅も風をいろどる物ゆえ入所とはいんあ物をあまりかくこ我入不
とえ有らしからぬ桜をかくてはこ月廿日のまちの程大補命婦あ世
してその桜花を合せ生ちなれ物をかくらつ海かあ人今き源氏城ん
ふのうすもくおりかるかつ
始りに言乃ちちらに花をうして神り始ゆ氏桜花乃ちを
くえんりう始へいとみくさ紀のくすだたそいてあかが者を
いよくは人花とす称し報ゆていあるしる思つ人もあらはれおりて始
乃ちるかてとくてくるひこにはに桜乃院にを海世生ち始ぬるる乃
あうこてとを思ひ世て源氏乃ち始等は

かつらきこてもうたにのよこの赤摘花を紅ふ生きん
公家ゆを出桜花のい花をを赤乃名を赤つひ花と云赤ひひ
花い紅花乃ちるこ今いかるとうまこと桜花乃ちるの事を赤乃
赤ていあるこのこひつをうにあてうやうなとかちり
一紅の四よりひつこ成ら桜花乃ちいるくこ人まて義
もいたうとこうて寄ひとていく成の今もか袖と云と
とこのとゆりこ琴はををすら御くおりて仲将ちを世ゆこ

紅葉賀

相つかの門位ます海を法華院へ紅葉をおこうへ
とて光禁中まて試楽乃んて源氏の君と舞を若紫
氏を海法を舞ひとてまい花を辰乃ひ中将舞ひ光も
人はいてゆれ光君はひていい花乃ちけ源山本こと乃ち大
四まれりちこ事つこあ世い紅葉の時紅葉のけそくしやと紅

せし左つかさへ見せ奉給ひしかなしき扱ひ在の思ひ候さ源氏より左つか
の女御へ御返事
抱れりしに立まゐるへくもあらぬ身の袖うちふりし心しりきや
こゝやおもひあつ身からも舞へとゝもにて見れはさあたにとて舞しと
から人の袖ふることは遠けれとたちゐにつけてあはれとは見き
青海波は唐にして楽之唐人の舞ニて唐ゆへ源氏の舞給ひしは唐さ
面白かりしとなり此頃紅葉の賀の日は親王達もおりまして給へるを
あつまりきるこさ紅葉の陰よりあれ給へる舞出給ひよかさりぬ事なし
すさて源氏の顔色けをされたる花の陰にたちる紅葉とおもふてさに
何ひとつれ人この若君達もおしなへて舞給ひしも夫れと源氏も此舞
給ひしに面白きとつきてせきうつらさ事よりも嵯峨まて左つかの腹に
皇子生給ひぬ実は源氏の御子なれ此皇子文五歳まて春宮に立給ひ
十一まて位につきまし御治世十八年の若菜の下にて御かくれ冷泉院

やさこ此御文かきての後に源内侍とて年十七八なる女房の名こそあれ源氏
の君の名めしきこの女なからまてこの侍ひしは女の中よりて扇を
かへてうたかへは寄せをかけて
君こはなほしの御すかたこそうつくしけれ紫
君はもつかへおりまさは打紅葉なとの御かへしとなりと源氏へ取なり
きるを文源内見付給ひてとみを返給ふしとえさてこを後々云て笑
源さよひの御温明殿のほとりとこうきこをへは内侍琵琶を
向くりて凡例中に来やらぬをすてしや云事をうきひきゐに源氏にあはむや
とうらひまうよ柳のむらひくこさせて打そへてうらふやうたけ書に
給て年老なる女もめつらかにおかしく抱給ふとこのまをとなぐり待給
て源氏のおかすかへ出ひりておもうしきみんとていふるきに御て笑
とめさたまりたにさ女さらてさ君くともをすりそうへ年十七八の女男
ちらの君達の中まて抱そらしてよすみそるさ海たりかりと源氏と

扨中将乃御あひ給りて源氏の君も舞の袖をかへし切て入らせ給ふに源氏中
将乃舞をらりて御らん給ひ帝の御感まし〳〵一級の位をまされけるとひ
くさに紅葉の賀と云は秋なる事をもつて花の賀とは差に
あらそを号をも此賀の事をものゝ云に賀は十月なる故は秋に付て云
に付つゝ賀を好むと云ひて四季のよに紅葉まて見るおほへし紅葉の賀とて
こまか調にうけ是を求のみに見て紅葉の賀とも賀ともいふ事も其後に藤
壺后に立の事

花宴

もみちの賀の又翌年の二月廿日に南殿に桜の宴を催し給ふに君
は春と云文字を賜りて作文を遊はし給ひ又面白く御ひとへ探韻とて文字を賜はる
御乃字をとらせ給ひ右大臣家とも見えて詩作り果て後に夜更て
春鶯囀と云舞面白く紅葉の賀の時青海波を舞給ひしを思召出て
春宮より源氏の君へかさしの花を給はりて舞給ひしかは一きは頭中将も
舞ハ柳花園と云舞をまひ給ふ其後は酒盛乃御あそひして夜更て二條后乃
后弘徽殿乃御方へ付て入らせ給ひ源氏は藤壺乃御かたをうかゝひ給ひけり
給へとおりまず戸口も鎖しかためて逢ひ給へき方もなけれは
たゝすみ給ふに弘徽殿の細殿に立寄給へハ三乃口もあき
たるにうち乃女の声にて朧月夜に似る物そなきと云哥を
吟して来るにいとうれしくてひきとゝめてあひ給ひぬさて名家
給へは誰そと問しかは名をも云はてたゝ其女の哥

うき身世にやかてきえなは尋ても草の原をはとはしとや思ふ

なの名をいはすともたつねきたらんと草葉の原まてもとめんと
云事は右大臣家のすゑの姫君なり

いつれそと露乃やとりをわかんまに小さゝか原に風もこそ吹

女乃やとりを尋ねんとする間に世の中の人々にもさはかれんと云事をさゝ原に
風もそよけとよみては風もたつ事あらんと云ふこゝて人々は源氏中

何事もいんつうにて廻れ給へ物ゝ給ひ
ぬ藤とう殿給へい物の三宮うさぎ殿まて今すめう月の水まうつまつる海を
給へ給へ山母屋いこさてんの御乃妹東宮にいとなけうしう右大臣の
御殿へ北の高殿給へんとて黒ゝ物のかり給へ〻こ腰へ〻黒へ物
給へこさてんの御うちにへをうけて月せまへい大臣殿乃へ〻迎ふ
奈給へまて奏殿乃御ひとめ北の方殿へ〻なはいるゝと給へ
さてをひうり給へ母へ母へ給へまてあらうれう〻源氏の殿門乃
ゆ〻しい東宮の御代めかこ子さてんのおとゝのひのまゝなるはよ世ふまうる
給ひくうつうひ給も山母元の山へうちおかう月殿乃寺吟給り山
まおかう月殿と申せし〻朱雀院の思へ〻源氏よけうさ給亜
に御ものとはなまうすはは給乃うゝはかまう

葵

山まうまて相つか乃御門皇女二宮賀茂の斎院は給りてはけいこ宮
殿乃野宮へうつうひ給首源氏乃殿乃元服年給義乃事〻山附源氏
大將乃れい殿まをひきうまゆ〻こ月拾うに源氏乃ふ乃うさあ山
乃うへうの殿乃御花たうすうやまう〻さをは乃もうくうひう拾月給
ゆ〻れう六条の高子市も給へうまよ葵の上の殿乃へ〻殿乃とを
給て車のうて市をけうをうくうやうて車乃うちかうもうれう〻
へうを乃ひのわくまをやらまてと云うは殿乃に色ひまうる世にをれ
なて日上も殿の御門乃ちうしめうれい源氏のうをとにおりまう
うへううゝくおまうはうにかうう事さへおまうまい根の行濃うて
拾乃宮やううめうひ乃上の殿門にたうれうう〻へ又賀茂祭
乃日殿源上と同車うて世ひる拾月に物うう附家上乃殿うち
うくなうきを世まはうて世てそこ給ひてちうとい山ひ給愛う
こうて給文いうふ事〻山附源氏の殿寺
ううゆううれちうう乃殿の月うう月さは生給未い我のうう月ん

蟹といへるハさき小説ていちひさう行く蟹のうつくしさるをとへる
ときうらやうあらとうつかの物語よりうしく紫乃上に似て
ちいろもいそうしん定かくみちひろ志かの北けいう
ねよころひろ志かしハ源氏乃須磨の定うれ事をとへり定かけまいち
いろも知るときてし蟹うさきに海雲を見る事あるとかくそ蟹哉
おりまして車乃うそ所を定る○終ゟ御ふし女車乃ままよ霧さそう
そて人をまよ○こと蟹て宮狩に御車を立給へとまひつ霧のつきをさうく
行ことをまてなを
ちかひや人の上うをきわつひゆへ神乃由よしれ御さ給
るときこゝをし給ひしれハ彼御乳母の病の由よりて惟光等と云老母
乃娘多物ん行乃んいとそれ人ハおひたゞしそてをやきとへ今日
の源ても御て見る気うて世安まりしいうてるれとも神の御めしことふ
はまつりの使みそを御うう事とし君ハめしくて思しめて御行る
んうわうふおもおもしく八十ちかう人まうへておかうひをかけまうしの人よけ
人そうもかりひとりもいとやしき家へしはしまつて来乃君をかり
此御所ハ車おうそひのねいとく世の中うるさう思ひ出すよし此
御後ハ前坊の姫君一人おハしますの母御息所よかくて給らん出
母は御本もいうけるれ姫君のひとりそうる給りもいつれく又源氏
の君を頼うそうり給君にそうる給ひんとするよ源氏ハ更す返ゝ思しそ
ころめ給ゝうつれとひまうぬ給ひ三とも八月日へておなひの上乃御屋
ちうくなまに彼物乃寄たこうか御てかうさらの今よ加給ひつ物の寄
乃いま家気を御本にまもてたゝうさうまを源氏ゑおわてよかね給比
御とのゝきまうをさたに行事のへハ源さりしくえつかり之ほれら庵ほのゝ
きてゆまい生き給りね人ゝ恨御命にそのこにうちかう寄まハ御内き気を
もうあ事やてう悔やしうきひさ晦くそれ日を送りよ秋乃御かゆ
乃乃老信家源氏うちらへ余給ひそ人ハすくなうの御深に彼乃物ま

あきこそ給はりつひのよをうしろひまかりたらんへつき事ありされは人々
わかき所まて除目も事やまきぬいそや御暇ともゆくゆく名残をしかき
里のさ御覧しれは例のまゝに名辺所にはおさめまかり付背はかる姑ゑきし
源氏の御年卅

のわきのめの煙はそれとわからねと給たかん人て世井乃ゆかしき嫩れし
いつきら尼人のり来る事といふ事かあまたの雲をあはれならんと之
無常の事なりいとも哀となれる御歎きは之給はりつひの三の御事も哀そ
うちへおはしける時源氏まかりけるに葵の上のうへおはしまれは兎にかくにこのうへ
し人のうつし守にたかなくりかひと此時のかなしみはいとやかにと深し
かくなる事に四十九日まて大臣殿まこもちおはしけるかきよきもおかつる文
かくせすてにより院へ参りおはしんとするに花ちるにはいかよりてかおはり
まさんとおほ大臣殿も名残ありくいふ由すんのうちいふ計かなしうらえん
光君十二の御時よりちくて給て今まてに見なれし事たえなけさ
給はむまうさしの若君もおはしませは何かにかまてうれしとかくさめ給てて
おすゑおき給ふかにぞ御存ちしてあるまじきとりのかすにぞなほかまかいよし
女房たちらと上中下皆紳をもつらふかきほと院乃御門へ参りはしりてさし
らま我か御里の二条院へおはしまして御さき御母上葵上とて共からら
御とへさきにまかせあつてさせすふにて葵上やらくおもかしひ給て
まとのけさうも御つとめへき給へるもあつよ新枕なすふに葵上年
はい親とのくおもひしよ四ッ乃かかめてうちよりてわかれて新枕まて
の行さらのこのまちぬまいる事を御覧しで推えをめつてはなしよ
ことくしきこさ御覧すてもちぬまつせすして心をその給ひまたなせ
嫁してはこ日にゆかり日よりめを用の事はまた葵上とて実子のき
れまと思ひて子のこといくつもおに二ッ一まてもあらんかとの給ふは
打ほ泣てちらかたを抱きまつりさ御やくおはしましへ葵上にかきま給て
のおかれ給ふとはしなはいはりてその給ふは三ッ一と云事源氏一かふの

らら二ケの口伝乃一人宮を所拙乃守に加給ひけれハそれにつきての舌
と申しし拙乃守の射給ひさき續々を祢子を據事をここにおひ
拙の守と申さる人乃身にこゆるとぞ

● 賢木

六条乃宮を前乃坊の後に先坊乃北の方おはしけるか秋好中宮の御母也
例のまうらハ左衛門司と云ふ人のひて禁中にて二年こそ内の御殿
てそのうち秋野宮に移り給ひあくる年の九月に伊勢へ下り給
へしを是いさうこととて嵯峨里にて一年おはしますこして二年めに
左衛門司に入く明る年の九月伊勢へ下り給ふ時ハ御息所も都をとおれ
るさすハ拙うくおはすうち参上かくを給ひてハ源氏乃君いよいよ
給ひかれいひらうらに思ひ立給ふ男君もさすかにいとおしくて
車うとやつして忍ひに野の宮へおはします九月七日の夕月夜乃程
なるを見つけさはき給ふ人すら拙いさ秋乃ちる頃おはしましへつゝはさら
栄もきこく嵯峨乃野は松風をこく吹あはせてそのこともきこてやまれ
拙乃言とも絶く守とういとえんなりし御宮を前坊すくらいておる
きぬ給へくろこれ鳥井かくくしく見えて立てうら小柴垣と外く
忘めやうらうに大横廊なすかにむかひて拙をこしこさ仮るかは宮に拙出
りさ人の月月と入ておはしまさんは御たちい衆にはおはしまさて御息所へ
仰せうつこ君へ給へハ人めもいとしおはしてたいめん給ひん事いかまほし
くおもかせと今夜かさりうてわたしもさけれはいと對面し給ひ遂に御前
嘉いおはすの方へハ入給ひすもののこにおはしていかりれなる御物さら乃
つめておる榊を折ていれゐる是を忘ろへまそうらん神のいかにもこへ佐ら
是にとの給へハ御息所乃御かへし

神垣ハしるしの杉もなきものをいかにまかへておれる榊そ

君すへくさふらしもなきをとかくいひまへて君すくるともなき御ことにて

少女子かあたりと思へハ榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ

[illegible]の[illegible]の[illegible]の

[illegible]生と云ふ是ひけの海と花表里同友
乃国を名て住のふと

須磨

相臺の院の御代はかやうの御代はかやうの后とうちの
源氏をなりさうへきさいさめをに上るもかりふておりまさいを後ふ
なりうしれんとおりて報うの世をうちそうたをおりすにわすれに報を
ていはるうちうくの高位をおりうちなかるへくおりひのうちはきの浦へ
やはなひ高ふうこうの対のもうれいおりかすに中うれい源氏に須さ
なりと結りんとううくて流なるもうしおりを世とせふなへていけうちん
と思ひへしのひの報うのた迷うれいいく年とかうをりふはうを
おりすにのうちいうをりとうに須磨にまりりたもんうをうに相
やせをへうの報をに須して山影のやうにうをせて住うとのへ女君源をうを色
まふに源氏

[illegible]
[illegible]
[illegible]

つさのひめ位すゝへさ而い行平の中納云乃りかさ乃つ位ゆ人きゝ
ゆめ乃ちきこ海ゆ乃こ位ゆ乃の之海ゆ乃ゝ
ゆ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

きこゆるまれ給へる横さまの乃殿たちを
友千鳥のうちあそびにうく暮い乱れ給へる乃殿たち
紙も書給へる歌の人々ともうちとなりきこえかく
はまゆくやあうくうち給へる蔵のこ乃はの乃中将今宰相
ふておれ給へるまた世の中なりまた世の中なりまた
つくにはうるもしおれて玉の浦へ船寄給ひつゝ伊勢乃物
と人々の人々の相行はうる位乃の橋ちて弟をうちうち夜長
なれい一枝をまち給へく侍うとつくりかゝまする給へ
ても松はすうるうる世の中をとくかりて世乃中をを
くちにそくうる酒うるうる酒うるまらせの給へうはまりて碑
乃うるうこれをうこそくを乃盃のうちと云楽天の白をうる
を給へくなく海と給ひひねこをひうてうこ月初日乃日ふれい
をくくなく海つくへ給ひひねこをひうてうこ月初日乃日ふれい
ひかうるを海のせておりまた海の

おもてうらくくして果うををんかをくなるめ給ひして八面乃神
長と思ふんおををうつうをうをはをい船うをを身乃長を
あるをおをおをうんとをかの給へふ俄よ風吹めてひちうを海うを
波も吉だく海のおをていふを海ををうをやうに光うをわうかを
おかをうに行ををうをを芦も乃はを御船に油り給ふ書おをを
すう神うをやうをおくくをををくをを船をををを
こ給へをうを行を知をうをの朱りて船をうめ乃はにうを寄給
をををあるをををあるをを海乃中の船をを乃はをを
ををうををおををを浦の給をををを船ををを君長
の乃朋友乃義理を事をうをを源氏のを海へおをひをを河をを
をうををををうんとの給へを君乃はやまりにうをををを文乃船
給へをまを給をを知を乃義理をを乃名を乃に何をを

明石

二月一日に[illegible]風とやうしてはの[illegible]なりて[illegible]
おかつうく[illegible]のすふ尋ものの[illegible]
浦風やいうよ吹[illegible]
[illegible]
[illegible]

衣えの山ぢ来ぬ山ぢ帰るまして入江つる海つる山ぢ浦ぢ
に入江りみてかつる浦ぢつる浦ぢ
月のかりつる浦ぢ琴ぢ乳ぢくし
ぶりつつて来て琵琶さうの琴さうの琴さうにて入江もかりて
又さうの琴をふ引りて見い母の
我姫の上ぢ
うまつく立てて前よりてい
る御て姫を
うしの引つを入江姫ひて

鶴ねい声もさうのやつもくと思ひわう浦さう成

源氏の物語のさうにて姫君ひやう浦ぢ

旅衣うつ形さふ行つ月の笠の物い音もひをす

我い声もひをひに浦さうしさうの入江音をとを在る

音をもさうねを井よりの俺すり帝の物をさうふ

かすりさふ入江の物語をさうへまてさふ山ぢ女さうへ

うねい入江さうして手

かうひしん琴を井を物をさうふ物ぢ思ふなりさん

源氏の山ぢ思も女の思ふも物ぢ手をさうさうと云へ

いつも物くさうまふへうて物ぢ行ぢ

何さ歌のさうつさふ物ぢ物ぢ物ぢ物ぢ物ぢ物ぢ

さうしく物ぢ物ぢて山ぢを引せ

たりぬ女さかつく我ぢ物ぢ

三日の月のかりつさに月を月色入江かりまを在り巣いとく

るふそおすうに位をかゝ浦くうそ人てゝ有りあさは古人ゝ有りて

秋の月の月けの弱る我ら

京詠も詠の空をうゝ

はまくてたふくなしとうゝ

うとんふてそおりうゝ

と我ら志をせんとそうる

志かくもつそかうゝ

とをりい源の事ゝ姫天ふあり

やうとうゝきゝ云ゝ

詠ひての文ゝ七月廿日ゝ

ゝへ入ゝ

家ゝ位をあり

浦ゝ

に家ゝふ位

秋ゝ

その詠よ

浦ゝ

打拾て詠い云ゝ浦位の名詠いふとれゝ

山浦をかてゝ詠をあゝ

ゝへつ名御もけ

家ゝ位をあり

浦ゝ

に家ゝふ位

秋ゝ

その詠よ

浦ゝ

名寺の御ゝ

こゝを法ゝ

源氏の大納云ゝ浦戸て京都の爰ゝ

事をれゝて秋ゝ御ゝ

ゝゝ二月ゝ云宮十一歳ゝ

位につき給ふ此時の摂政は承香殿の御母の兄藤原実定
右大将実房公の父内大臣公の兄内大臣よりの摂政
なり給ふ此摂政を兼たる内大臣へ申つぎ給ふ一度位も
ゆづりて出家し給ふ和の山の法皇忠仁公六十三にて摂政
なりたまふ又吳羽の中宮の御母藤原の大子惠帝の時高山よりかくれ給ひし諸
二宮世に例なし例なしとて天も恐れ給ふ
大政大臣は成給ひぬ此時は大臣家も四十三にて明石の入道の
女をもとめ給ふ
三月十六日に女子生給ふ
入道なる者なれども后の母なり
尋常なる事にあらず次に仏の石よりおこりて
此時は位もあらず義員の家
秋位若にまして給ふ公卿殿上人数多くなり給ふ
まつり給ふ世もひくく計なりおもひ
岸は母さへ世にはなれ
四人大臣殿乃位をとられ
あまかるべきすがたなり
此ものさにおもひ
をとゝぶせんとて清をさゝ
此殿よりあひ
うれしかりそこなりて
三月にて
なくなりぬ
つゝかさ

[illegible]

枝なりそうたとのもうしけるを源氏
枝なりそうたとのひもかけをとりてこれも
こんをまつるまとりなりて名をとりてあ
てゐにのこしまゐらせたりけるとて付たりけるを
源氏ときこしめして西の后のうさはかりこそ
必衰の理とおぼしめしけれ

蓬生

[illegible]
[illegible]
[illegible]

のとうしいあまりきさすらうとこゝに伝伝も今はとかゝる所をこそ
おもうに続てもやまもりの品の神もけてちうん
やうて神ものんのつんちうんい折を言せんとこゝを品の神の祖神の
ことゝうてはいふよくまうさうきさ海そおすうに知月分よ光君
花散里へおりすうに位のりうに芒うう恋の本三三けく松ふ花咲から
てまりひ来うあいうをんんちうすうとおりもりに光信ゝ分りきしは
うつうんとおりてまつ惟光を入てあうひとを結よんううぬき海れ
蓬生の中をゝる入結よ高三けりふい惟光ゝるのひうそはこうの蓬
うしつ入をなりの時あうこそ打そうけ御里まつすうにきに本抜下
ゝ海いあはまうのそしまあはいすうんひす

忍ても我こそとうめ位もうくゝ物うこ蓬のかれんを
荒うう宿の松ゝをたゝてこうんゝいゝ報うそいゝこ来ふうく物ゝ海
袁におりてたべをつうりつ蓬ううゝ荒ゝう布つくうを荒

此きさ海うゝ源氏の光を位を高ひあまうの年をすうう結を
うゝ位のかうくおりけゝ又ゝ海りの弟にゝうゝ結うゝて山吉ゝに三年
計をこう結てはゝ二条院の東院ゝ住ますゝ光結蓬生ゝ住ゝ海い
うけまゝ蓬ゝうゝ海いひくきをしゝうきまうきうをのり

関屋

伊与のすけしひいい光信のうゝに加てうのうひうの位をゝ書
の宇都ゝうのもにのりうゝ和歌の実入自源氏位新ゝうに石山ゝ寺を
結ひうゝに位ゝ分車もかうおりて松の木ゝに加こゝ寺つゝを
蓬にしゝ小者ゝのひいい今ゝ右衛つのうけうゝ光も光信ゝ位れり
とうゝ光をゝうの実ひうへおりひうをゝうをゝうの結へうのうせゝうの右
もしゝうゝおりひ光をゝすうにのりれるゝいのうのをゝひま

世の中ゝ光ゝ世ゝうをゝうをゝうゝ位ゝ光ゝ
らん海ゝ信水ゝうへうんうゝんゝ海ゝうゝゝいゝ海ゝうの位ゝ背ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やうゝ爰代の法門繪をこのゝ給よ梅つかの無御繪をゝかせ給へは
法門相傳のつりて梅つかにのゝこ和りませいとそしとそ樟中納言殿ち
も相ゝの繪をこゝそへんへまつりせらる源氏又は八へ人を書んとそ
の繪を案とても給たに為ひ為あ給ふ法ゝ明石よ為樣のゝ和ゝ
ゝ為繪と出つつそに女房ふ人を書ら給を今まそひめを為ゝ為ゝ
ゝ為ゝ
ゝ為ゝ
源氏の為繪ゝ人給ひて我も法さに和ゝ為ゝ給を書てもらゝ
ゝ為ゝ
ゝ為ゝ
ゝ為

はなのうちはなをまへにうえたれば、いさんもかいなけれども、はちうえにうつ
えのんでえだ井はなに入るのはかりの中務卿宮とまゐりしの給
ふるをきゝ給ひ、そこなる小宿ろうやうにてゆるす男を思ひもてはなさ
やうをきゝ給ひ、合家をば作りたてゝ、のちかくうつしかへをわ〳〵へ申給ふ
おのうちをかりそかりたてゝ、号しかんつゝをかくおりて、雅楽
つゝうつ行家のえつゝひうとこゝやうにはるさせのふさてさこゝ西の孝
八こを明石ひとひふつゝうちに入るいかゝうふ事かしかうかく又うは
あひうまて女あ天うをを見て、ゐかそくも侍ひう
入るのかの方ものかんやすにはるは同宿ふもを西をおこうひうにて
かけうしかををたうゆくかしうゆせうれ給わさゆ弟
ひ浦をうまはるはい社うち参れいうゐ川わうそのかうへす西乃
さ海ま名所のうわかて神をうを大井にさうて又をい
川のかうの位のまそう法位ゆ行ゆ海つうんゐて西うへうやう法

なうのうとうわ〳〵やうてうをうはるうをとくたうはるに見法
へあをいはまくううまに明石をおはうさうをよそ法へはひ琴
をうさかすあも松風吹て抱をこそれい尾天もおさわうて身を
うへて独へまうゐ山里ひうにはうにまうわせうう新へのかりてい集法
かへうてくをうをいうさうそあをて松風をうはひうさうやう
なうをうを光源の法をいくゐへうを又身をかへてうりを尾にかうる
とをへりゆ寺をゆをうの名をすはのうのを三寺毋

古今ゝ尺秘乃歌を高ひてさへつうるを作りわくらん

父の入るうをを高てうくをもうあ別をへきへうをを源氏乃わ〳〵にはれ
をあるをもはうへ〳〵をへつゝ抱をりをを琴うんもを尾天の新古尼
明石法乃浦を古加へ〳〵かて神ゆうをうおりてう
にをそ新法豊あにはうへをうをを又ををををにをりををりを
ををうはをゆ二三月ゆはんを家乃上にはうりはたうかを所ゆ大井へ

おりつつさぶらひけるに、[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]神のたまはくるしきことわひとこゝに地名をとゝめたるさに
[illegible]服衣に用ゐんゝ以前の五ゐにをゝ乃女院と号奉る乃名をも
以年奏上の又乃后樓院の后桃園或乃仁もかゝれ[illegible]やんこれうさ
[illegible]ゆきうせのひ世中さいうく例さうひうを里乃をきこ尺て
[illegible]久うも[illegible]せ給ふ[illegible]ものかゝる事をゝ[illegible]せこを[illegible]乃
女院の后毋后の御ちうさ海乃[illegible]て乃[illegible]
[illegible]乃[illegible]中乃よ乃ふさ[illegible]に[illegible]
[illegible]ひて世の中のてゝもそうゝ[illegible]つのそふ源氏のゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]

[illegible]ひ[illegible]せのてゝ乃とにもそ[illegible]
[illegible]せ[illegible]

樓

桃乃ゝ[illegible]院よ[illegible]ひ[illegible]桃園[illegible]
[illegible]
[illegible]

月おの給ふまゝに桂乃花のうつるやうにぬん
ぬ姫君をもひとりをもよりいをにらてと
付て月おもしろさにあひ給ふ
なりけるにやうんもぶうとおりへくもすひをに
結果て雲乃まうしよりかをにうつる桂
乃やうにぬんとにらて我うちかをもあつかりきこにおを
うりや早ゝての方を乃若に方をて付りくひ光を桂の
敵とゆこやうにふくうぬかとよ給ふ
てをうをうをかをにうをにらてをうをうをにうをにうをに

かいのてくだいなりしかは八月十二日にてうの大夫よし
てをもてなしをこなひ給ふ毎年の恒例なりしかは
時新姫二人か代姫大蔵卿の姫と申いまは嫁さう女成
用可姫ともに姫へ二人よりてこれをこなひ給ふ
文頼朝にて文覚の二人の姫二人なりしかは
なを八月姫の姫をは源氏の大将の新姫と申
とりもち給へ新姫をは九郎殿にてをはしまし
八月姫をは源氏の大将の姫はなを
うり給ひしかとも九郎殿にて大武の姫はなを
大武の姫をつりうり給ふ

山吹も神ふしぬ人天津神なりこと世の友よりひへぬまい
友源氏の方の中へ我よりひもとも神ふしぬんとこ
神ふしぬとい給ふりとも九郎殿
姫をは姫を久寿の人なりひてを弁の殿をなりこと
にも人をやとりて九郎殿
まさきへ春日殿をつりて女をて源氏大政大臣殿
こもかく静の方は位殿をもつくしひろくこめてこと
ます女房なをもあつめ給ふの方
あををかりを殿にをつて北殿
欲をへ生をて后をなりす殿
くうつりをひつをりの方
ををりに北殿の新をこの方
なを八月殿のあひてをりの方
うをりの殿をはをりの
くをさしめをて外ををりて
殿ををりは殿ををりて
をををを

名も知れぬ山々のうへより我いかりるるとは後より振返りまゐる事の
所縁上おりまゐらせ候へ共是は花咲の
花山吹岩ばくしゝ山との事乃至てはなるひと様て社乃せんさいもまた
さう事をはなれ山ばかりなるまいこうそ事はれ前とひとりの人間この
みのすに書よあてまゐもせ給ひ乃法華上ちうつりの青
よあてい紅葉村くを付ておりのさ枝ち風折ふる夕暮に花咲
を第乃ゆさよ入てうちふるつくさうそ世て中高ち嶺上へ家せ給ふ
ふうう事ば国ハ我やこの紅葉を風乃つてにはふみよ
嶺上の方をうて事ば国とうてうそ世ばに風のはてまゐ
やこそ乃第乃ゆさふ花を数先の山のんをうして紅葉の枝かけて
風ふ数とみちいうつ事乃ゆを紅葉の枝はをそうちんあ
枝乃をに事をこめて乃んれを紅葉いろさ事とを枝をはの先
ゆふ中乃れをとみちの家付えふに紅ふりをを事にかて新盤

山乃西ハ山をはへとゆ枝ふ今ふりみちをひとさん新田姫の出
乃而とあをいを先をさてをはかめとおゆゆ又乃年ば代
遊敏をうをうて大井乃ばさい数すぬ家とふはひ枝りつみうう
つろひをて枝ひ後年月まわうはらひぬ

●むうつう

夕影の上ふを枝ひて後河内のと西京を位をう男の大宰乃ゆ
に加てををいはのもをうゆ夕乃上の法振ばをうはをはを
はとのりにおりうを振うを出ひて体ひをう姫先乃実ば父を
とう四大臣ひ乃中枝ふひ人をを本ふ乃出ふうそうをう
あをを海をを姫先をて毎山をふてをうつ法ふに年をへてゆ
をいやうおうひ枝をにかうをを枝へうを決ばて肥後国
に大夫の殿ていふひをて所ばは法けていおりてをう男ひをう
とあのを一段枝へのゆを年をて中ふ人の松の方をを枝ふを

きしいろくひのまつへのうらの男はいやまひてうせぬ浦心
こんよも姫君をうなうす殿のの殿をまつへきこしのひ到へかりに
乃殿支盛吉日をとりてひてまつ殿ちうおんとおもへうをきこえけ
のかんとおもふにのゝはさこの人へをうの人へをいた支盛にかくひ付
らまそ盛にんせにうの一男よを法名しひいしひく教者よそ殿
の殿をんてをまひつ儀まやを殿をまへてにをのうの江御三位殿
まを浦の姫二人をうもの人へ國よ男をてをまの殿君アをとふ
ひをめを法名をうを計をのうのうよ少く位不をを殿おをまを
なけをを腹ををにをうをまをうの殿の法乃京家に殿ををへう
殿をうををを殿にをををををををく

浦潟をこををををををををををを方やいをくを浦をををををを
殿アををををを浦潟姫殿殿所ををををを殿ををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを

堀殿のおにうこを浦をををををををを

殿ををををを殿をををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを

さて拙へさてわつらに方を拙乃傳ら尺まい芳盛の尺んに
すに又こ条こ下す女もも尺ん西新ら まいひ寸ほ行くうに
姫天も家よおりますと云に言っておりて中乃屋てをとらひ
のけつうまてさ作りうけまいさんこの条に加さこの御北之言
さて右近う奇よ

二ぬ乃板のさちをを新をい古河の辺を天とう尺ますや
初源よ新をけあゆををこひさう西へまひ姫天と尺付うわ云こ姫天
さつせ川をやくの乃ちを三つ拙をう乃行廉し多こ今孔
ぬをやくのとをひうれとうけいこいけうれとさけくへうれい者の
こ三ふ拙をうふ方をに拙てタくう乃うへのるこをい多もかそ
やこ源乃つをかて京をそこさこのやうう西うつ方をい都ゆ西
源氏まさう孔く寸拙ゆ多新の高乃ゆうう尺付ちう小実し
多に年月重を三重かくおりゆ寸人へのゆううれい在けへのさ

みよすとれりてたをにけうひ合せをひにしへうう拙ひて尺ふ
よかうちさうにて仁さ海をつふひふうねいをくこそをひて
拙このこ三ふ人こまを尺をけくこ在んとおりうこれうれ猫此乃寸ま

忘ちうう多そしれれ和ちいうう多寸ちと新こ拙うんん
多ふ乃方を忘ちうう人い秋ちまて姫天い実の新とれ新ちう
拙うかこ山寸山へ西うつちを付ちう天乃名も此多ちう西とこ
西うつこの元年二ちうのんう多寸多寸うとけも我けひを加ちを人をれ
まこうう乃ちかやおりて倉拙よちうう拙りこ年乃書に西加つ拙ちう
そくまうせ拙よ衣裾乃三海ちを年ひうへこりてうわつこも
ちのつて遠りう拙つかそにけつの重拙へうう拙へくへも三月よ月拙へき
さうそくくも人の海よ三さうひつくちうを尺も在ちうれつうち
新梅のんうさたう元ひ海のけうちさに今やうこちへて宗の上
梅かそうちよこねうちへて明右乃姫天乃さ花園乃ちう梅よきかねり

くゝへて花園里にゆきさにゆきつゝ
なら柳のとり枝をかゝるまゝにさしそ
ら色ふかき梅の枝をとりて
やゝ日のかさねてゆくのゝ上をあ
そへて宮殿の尼君よりはあるべき
らひて遣りの年の姫よりそ
さゆるゝ人をゝ元ひそめ
おのこゝにまゐりそ貴女
紅のうへ山吹の面白き
乃事うちあひ
にをして宗の
初孫

正月一日子日にあたりうの年ときは
もちゐるゝみにひとつをそめ
して宗のうへを我ゝをひきんとの
落こゝろをけめる池のこゝに
源氏の君をもかゝる年の氷池
異方の池の渡ふまゝ代と
ゆきゝにいとひとりをそめ
と書元日の書はゝ
のうへ清ゝ
ひけこゝろこゝ
けてそれをひけこと付て
年月をわふひをそ
上句我身のすゝ
宗上人をて
ものゝ
ゝ
ゝ

夫の名に付きて姫君は
引きうつる年ごろ
年月経ても生きもかうる世の常なれば
源氏の御姫君は宇治にかくれ給ひ
かくれにしかばかりすぐしけるも世の
●胡蝶
春の御殿に六条院へまうでて
始めて三月の十余日なれば
花は盛りにて春の光のどかなる
とりしてうちしきりに公の友
彩りを尽して宴の
さらにさそはれ給ひ
よ山吹をうち始めて
花の下の
山吹の
花園の
春は
こてふ
昨日
●蛍
源氏の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はかゝいあうゝくよやうゝくいとねへらさうひのかゝうちやをまん
やうて申うゝのかゝりの西の畫へまてうゝ始へうよ山先先生もゝ始はまり
始西府の方先さうい申かゝうにはまをのはたうかゝまて源氏の姫と
の思ひ始ひて月をとけつゝ山おもひ申うゝのおうすう而へけりこさかり
をよおりへうれを申うゝのおへへの庭まこと者ゝうてもうへ始すかゝゝ
このうをはくゝてうゝかてゝとやゝわうてゝこう始ゝこなまうゝ
ひのまゝにおゝゝぬゝ山へゝわすゝ山へうゝ者ゝ申かはらと我あに
せねゝ山へうゝへゝて先者ゝう海始ひあうゝ始よ申かゝうゝ聚ゝうゝ
うゝ名ゝゝ始始みて申うゝゝ文の西府よ月をまゝんや始先
の事をゝさゝの者ゝて始始ゝる事うゝのあひをおゝ

かてゝこの成うゝきうゝを月いおのゝこおをへゝや新ん
申うゝ此先西府へうんをまのゝ
やゝ云のゝうてゝこの御文一巻二名へおゝ巻ゝ通とりて者ゝの

名おを始友いちんかゝのんゝ

箒火

源氏のおゝゝ申うゝと我に始うゝとてゝゝ始へたまゝのはを
ら始へかゝゝ色ゝうゝ始へんをゝてゝゝすゝんをゝてゝゝひゝ始
ふ杜よも加ね初風源く萩のゝやゝく春ゝう始へかをおゝ申ゝ無
うてゝ申うゝのゝへゝてゝう始よ六の月よゝとく入をかゝう始
なゝに琴を始てゝうゝ申ゝ始ゝかゝうゝひゝあゝと西
始ゝよ秋をゝう始ゝへかもとゝひへゝて始りのんゝすゝ始へ
なゝうかゝら火の消ゝうゝをゝりゝつけゝ始月ゝぬ時始ゝとふ
焼をかゝら火ゝへゝうゝ山おゝ始ゝ

箒火よゝゝゝ京の始ゝゝて世よゝゝて世ぬけのゝかゝ申ゝ
ゝうゝゝゝゝ我京の始の半ゝゝうゝひゝよゝとゝて始先の
始おゝゝ始ゝよゝかゝら火の始ゝたゝ糠ゝなゝゝ

かゝり火にさゝすきにゆり抱なりそしなさんに抱ひるゝ
けち給へと人のあやまりに言て名殺わるさなる御婿殿